

鯨・夏・ともすれば山手線

ジョーンズ大翔

という詩をわたしは書いたのです  
夏に。

蟬

太陽

Tシャツ

あるいは花火は捨てました

わたしのたましいは

ひたひたに浸された記憶ですゆえ

わたしはその日鯨を殺したのではない

わたしは

窓の外を見つめる

あなたの

微笑みの丘の朱色や

言葉のための番いの蕾から

懐かしさを忘れた痛みが

空になりたいと願う砂丘が

あなたの瞳へ

群青を浸し

それを隠し

あるいはまどろみながら

たゆたう睫毛の愛おしかったことを

ささやかな許しを

ひそやかに抱きしめることしかできず

あなたへ

祈れますように

そのたびに夏が

わたしたちを忘れられますように

「カフェオレとカフェラテの違いは何でしょう」

紙芝居のような空間

夏の白い太陽のひかりが

車窓を抜け

山手線の

少女が読む小説を包み

あるいはそれをまばゆくし

わたしのまなざしと永遠とを飲み込みながら

あなたの白いワンピースを

より一層切なくしながら

約束とは言えぬほどの

ひらひらの切手となって

ワンピースの奥の

小さな肩の先の

あなたのようなじの

透き通った産毛を縫って

地へ地へ降ろうと

ひっそりと流れる

一雫の汗へ

まだ

銀河を贈っているのです